

中間評価論文要旨

日本統治時代の台湾の国語読本における 「説話」の機能に関する考察 —「国民的精神」の涵養を中心に—

劉 晏 君*

1. 研究の目的と方法

今日の日本における小学校の「国語科用教科書」には、文学作品が多く掲載されている。これに対し、台湾の小学校の「国語科用教科書」には、日本のように多様な文学作品が掲載されていない。このような差異が生じた要因を明らかにするには、台湾と日本において「国語」教育が成立した1900年前後に遡って両者の「国語」科に、それぞれ期待された教育内容を検討することが必要である。当時の両者の差異を明らかにすることができれば、現在両者の「国語科用教科書」に認められる差異が生じたが要因の一端が明らかになると考えられる。本研究では、このような教材採択の違いをもたらした要因はどこにあるのか検討し、両者の編纂規定の違いが、その後の教材選択にどのように反映しているのか探ることで、台湾の「国語科用教科書」における文学教材の位置付けの歴史の変遷を明らかにすることを試みた。そのために本研究では、文学作品に着目し分析を行った。教材の分析を進めるにあたっては、まず、陳培豊（2001）の『「同化」の同床異夢』をもとに、分析のための基本的枠組を検討した。

陳は、台湾の「国語」教育が、日本の台湾統治の基本方針である「同化」の中核にあったことを前提とし、植民地教育史である「国語教育史」を再考している。そして、「同化」の実質が多義的であると指摘し、「民族への同化」、「文明への同化」という二つの枠組みを用いて、「国語教育」における台湾統治政策を解明した。陳は、「国語科用教科書」におけるこれら二つの「同化」の枠組みの反映を、それぞれ「皇室、国家関連」の教材と「実学性」の教材から読み取ろうとした。陳の研究により、このような教材が「同化政策」において果たした役割が明瞭になった。ただし、「同化政策」の動向が、教材の編纂方針に与えた影響について

*人文科教育学

は、十分明らかにされているとは言えず、他教科との関連も踏まえたより詳細な検討が課題として残されていた。他教科との関連に関しては、陳も、「国語科用教科書」における教材の変動の要因として取り上げている。しかし、陳が研究に用いた蔡錦堂（1993）による台湾の「国語科用教科書」の教材分析の結果からだけでは、他教科との関連を検討するには十分であるとはいえない。なぜなら、蔡が援用している、日本戦前の国定「国語科用教科書」を分析した唐沢富太郎（1956）の分類基準は、今日的な教科の分類基準に基づいていないため、これをもとに分析を行っても、教科固有の内容まで明確にすることができないからである。そのため、本研究では甲斐雄一郎（2007）による「国語科」の教材規定を分類基準とした枠組を援用し、本節の終わりに示すような新たな分類基準を設定し、これをもとに教材の分析を行った。さらに陳は、教材の特徴を考察する際に、「国語科」の目的や教授内容を規定する公学校規定を参考としている反面、編纂趣意書を参考している編纂趣意書を参考に検討していない。しかし、「国語科」の目的や教授内容が、いかに教材の特徴と関連しているのか検討するためには、編纂趣意書における規定を資料として用いる必要がある。そこで、本研究では、日本の国定教科書および他教科との関連を踏まえたうえ、公学校規定における「国語科」の主旨および教授内容に関する規定と、編纂趣意書における規定を中心として教材を解釈することで、各時期の台湾の教科書に採択された文学作品の特徴を把握することにした。これにより、教材採択の経過を明らかにし、採択された教材の「国語」教育における位置付けを明らかにできると考える。なお、本研究において分析対象とした文学作品は、「童話、神話、伝説」など、丸山林平（1925）が定義する「物語の形式をとる文として」挙げられたジャンルに限定している。そして、これらの総括的な名称として、「物語の形式をとる文として」の教材に含まれている「童話、神話、伝説」などをすべて包含する概念としてふさわしいと考えられる「説話」を用いる。本研究では、この丸山の定義に従って教科書から「説話」を抽出し、最終的には、これらを「神話」「国民的童話」「童話」「修身的説話」「歴史的説話」に細分した。さらに、「説話」に含まれたメッセージを浮き彫りにするため、国定修身科用教科書の編纂趣意書における「徳目」の規定に依拠し、「徳目」ごとに分類している。

2. 論文の構成

序章 研究の目的及び概要

第1節 研究の目的と問題の所在

第2節 研究の方法

第一章 台湾第一期における「説話」の特徴

第1節 台湾第一期における「説話」の機能

第2節 台湾第一期および国定第一期における「説話」の比較

第二章 台湾第二期における「説話」の特徴

第1節 国定第一期から国定第二期までの「説話」の変遷

第2節 台湾第一期から台湾第二期までの「説話」の変遷

第三章 台湾第三期における「説話」の特徴

第1節 国定第三期における「説話」の特徴

第2節 台湾第三期における「説話」の特徴

終章

第1節 「国語科」における「説話」の位置づけ

1. 「同化」政策の分析枠組みとしての二つの「同化」－「文明への同化」および「民族への同化」
2. 台湾第一期における「説話」の位置づけ
3. 台湾第二期における二つの「同化」の重点移動の反映
4. 台湾第三期における「民族への同化」の強化の反映

第2節 本研究の結論および今後の課題

3. 論文の概要

第1章においては、行政上必要な通訳に携わる人材を養成する目的であった日本語教育から、台湾人児童を対象とした公学校における「国語科」教育へ移行した時期において編纂された、台湾第一期の「説話」の特徴を明らかにした。まず、公学校の主旨である「徳教」「実学」を通して「国民タルノ性格」を養成すると同時に「国語」を教授する規定が、「国語科」の主旨や編纂の趣意にどのように反映したかを検討した。そして、このような検討を踏まえ、本研究の分析方法を用い、国定第一期と比較することによって、台湾第一期における「説話」の機能と特徴を検討した。その結果、台湾第一期において採択された「説話」は、「言語ノ形式」を授けるためのものであるとともに、「徳目」を含む「説話」が、公学校規則

における「徳教」を施す目的を担う機能を、ともに果たしていたことが明らかになった。また、国定第一期との比較によって、台湾第一期の「説話」に含まれている「徳目」の違いを、台湾第一期の特徴として挙げる事が出来る。その違いとは、国定第一期では「勇敢」「忠義」が重視されているのに対し、台湾第一期では「勤勉」「儉約」などが重視されていることである。

第2章では台湾第二期を取り上げた。そして、台湾と日本との教材の選択方針に分岐が生じたことによって、「説話」の構成にどのような影響が生じ、どのような特徴が見られるのかを考察した。国定第二期の編纂趣意には、「特殊国民的材料」および「文学的趣味」を増加する規定が加えられた。そして歴史科が独立した教科として新設されたことによって「国語科」において歴史科の教科内容を担う役割が軽減された。このような要素の変化を受け、国定第二期の「説話」の特徴については次の二点を挙げる事ができる。一点目は、国定第二期における「歴史的教材」が「物語化」され「歴史的説話」が増加したことである。二点目は、「個人」および「国民」の「徳目」を含む「歴史的説話」の増加が、「特殊国民的材料」を添加した反映と見なす事ができることである。しかし、台湾第二期では、国定第二期のこのような特徴が見られない。台湾第二期が編纂される前に改正された公学校規定（1912(大正1)年）では、「国語科」の主旨に「国民的精神ノ涵養」の記述が加えられた。そして、編纂趣意書では「国民的精神ノ涵養」を重点とするため、「趣味ヲ豊富」を二の次にすると規定されている。このような編纂方針の下、台湾第二期における「説話」は、以下二点の特徴が見られる。一点目の特徴は、「国民的精神ノ涵養」が重視されたため、「国民」の「徳目」を含む「歴史的説話」は増加し、「国民的精神」を涵養する役割が付与された。二点目の特徴は、「趣味ヲ豊富」にすることが二の次にされたため、全体的な「説話」の教材数が減少し、そのうち特に「徳目」を持たない「童話」が削減された。そして、台湾第二期と国定第二期との比較の結果、両者において重点としている「徳目」が異なっていることが明らかになった。

第3章では台湾第三期を取り上げた。この教科書の編纂趣意書には国定第二期、国定第三期を参照するということが明記された。このことが台湾第三期に反映された内容を検討するために台湾第三期および国定第三期を比較した結果、共通点と相違点が認められた。その共通点とは、教材選択に影響を与える「児童中心主義」や「国民的精神ノ涵養」が強化されたという二つの要因の反映が、ともに国

定第三期および台湾第三期に見られることである。このような共通点は、台湾の国語科用教科書の「説話」の編纂方針が国定の編纂方針に近づいてきていることを意味するのである。一方、相違点とは、同じ「国民的精神ノ涵養」を掲げているにもかかわらず、台湾第三期では、「忠義」や「学問」の教材が採択されるようになったものの、「勇敢」などの「徳目」が依然として重視されていないことである。

終章においては、第一章から第三章までに検討した台湾第一期から台湾第三期の特徴を、陳の「同化」の分析枠組を援用しながら「説話」の「国語教育」における位置付けを考察した。陳は、「智育」が「文明への同化」、「德育」が「民族への同化」を象徴していると述べている。そして、この二つの枠組を用い、統治者側の意図、教育機関に関する規定および「国語科用教科書」から、二つの「同化」の傾向の反映を検証した。しかし、陳の教材に関する考察は不十分であった。それは、日本の「国語科用教科書」と比較を行っておらず、台湾の「国語科用教科用書」の特殊性が明白にならないためである。また、陳は、他教科の教材との関連に着目しているものの、先述のように、陳が用いている蔡の教材分析では、他教科の教材との関連が明らかにならない。以上の点に関して、本研究では、以下のような陳と異なった結果が得られた。一点目として、陳は、修身の教材を「皇室、国家関連」の教材と定義している。しかし、本研究で行った修身科の教授内容や編纂趣意書の規定に関する検討では、「皇室、国家関連」の教材だけが修身の教材とは言えないことが示された。二点目として、陳は、台湾第二期では、「実学性」の教材がやや減少し、「修身科」の新設によって「国語科」における「德育」の役割が軽減されたにもかかわらず「皇室、国家関連」の教材が増加したことから、「同化」の重点が「文明への同化」から「民族への同化」へ移行したと述べている。そして、「実学性」の教材が減少したのは、「民族への同化」が重視されたため縮小せざるを得なかったためとしている。しかし、本研究における公学校の主旨や「国語科」に関する規定を踏まえた分析によれば、「実学性」の教材が少なくなったのは、台湾の教育制度の改正により「実業科」が新設されたため、台湾第二期が編纂された時期には「実学性」の教材を包含する必要性がなくなったためと考えられた。すなわち、公学校において全体的に「民族への同化」が強化されたのは、必ずしも「同化」の重点が「文明への同化」から「民族への同化」へ移行したためではないといえる。

さらに、陳は、1919(大正8)年の台湾教育令の制定によって「民族への同化」

がより一層強化されたと述べている。しかし、台湾教育令が制定された後に編纂された台湾第三期については考察を行っていない。前述したように、台湾第三期において「民族への同化」が強化されたことの教材への反映は、単に「実学性」や「皇室、国家関連」の教材の比重の変化からだけでは読み取れるものではない。むしろ、「民族への同化」の反映は、本研究で考察した「説話」の変遷に示されていると考えられる。これは、台湾第二期に比べ、台湾第三期において「徳育」および「国民的精神」を涵養する教材である「歴史的説話」が、一番大きい増加を示している点からも読み取ることができるのである。

4. 今後の課題

今後は、昭和戦前期までを研究の範囲とし「説話」の機能および位置づけの変遷を詳細に辿っていくことと、および、各「説話」の教材研究についての認識を深めていくことも課題としている。

5. 主要参考文献

- 陳培豊（2001）『同化の同床異夢』三元社
海後宗臣、仲新編（1969）『近代日本教科書総説，解説篇』講談社
駒込武（1996）『植民地帝国日本の文化統合』岩波書店
甲斐雄一郎（2007）「『台湾教科用書国民読本』における国語教科書からの継承の様相」『台湾日本語文學報』22
唐沢富太郎（1989）『唐沢富太郎著作集第六巻 教科書の歴史.上』ぎょうせい
丸山林平（1925）『読方教育の本質』目黒書店
西川長夫（1993）「国家イデオロギーとしての文明と文化」『思想』1993年五月号
周琬筠，許佩賢，蔡錦堂（2003）『日治時期台灣公學校與國民學校國語讀本 解説．總目次．索引』南天書局